

新刊紹介

現代の宗教哲學 菅 圓 吉 著

本書は日本評論社で刊行する「現代哲學全集」の第二十卷として昨秋公にされたもの、著者は大正八年の宗教學出身、現在在立教大學教授の職にある人、著者自ら序文の中で断つて居られるやうに本書の内容は一九二九年に出た Emil Brunner: *Religionsphilosophie evangelischer Theologie* の紹介である。著者の意見に依れば宗教哲學は今日偉大なる轉向を示してゐるのであつて現代の世界を支配する宗教思潮の主流は辯證法神學である。そこで此の辯證法神學に於ける宗教哲學を書かうといふのが本書「現代の宗教哲學」を執筆する動機であつたわけである。然るに「いろ／＼の理由よりして、前記アルンナーの書物の内容を忠實に紹介する事が、現代の我が國の思想界にとつて最も適當と信じ」られ、「且つ色々事情の爲めに、執筆する前に持つて居た可成り大きい希望や抱負をば果す事が出来ず結局アルンナーの紹介に終つて」しまつたと記して居られるが、此の事は筆者も亦著者及び讀者と共に遺憾の感を同じうするものである。何故かならば著者は筆者の記憶にして誤らなければ、數年前までは歴史主義の立場に立つてトルンチを奉じ、社會的基督教の運動の東日本の指導者として學生基督教青年會邊りを率ゐて居られたのであり、しかも此處數年の「時代

の轉回期に直面して」、自ら序文中に記して居られる「其の餘りにも急速度の、而して又急角度の方向轉換」を自ら經驗し、その宗教哲學の立場に於ては「百八十度の轉回」をなして正直に「轉向」を聲明し學的良心をば完うされた方である。若しも著者の此の間に於ける宗教的並びに學的苦悶の跡をば著者自らの筆に知る事を得たとしたら、それはどれだけ吾々を益するであらうかと思ふからである。しかも「私自身も必ずしも辯證法神學の思想を—も二もなく信奉しようとする者ではない。其處には色々の問題の伏在してゐる事を十分よく知つてゐる」と断つて居られる處を見ると本書がアルンナーの紹介、終つてゐる事が益々物足りなく、著者が此神學に觸れて「宗教哲學の建直しを迫られてゐる事實」がよき學的實りを結んで他日再び吾等之を聞く日の來らん事を望んで止まな

い。

「現代の宗教哲學」としてアルンナーの上記の著者が代表的な一例としてとりあげられた事は議論の餘地はあるとしても、確かに意味のある事であり又よき思ひ付きであると思はれる。アルンナーの宗教哲學の立場は一言にして云へば、大ざつばな云ひ方ではあるが從來のイデアリスムの立場に立つ宗教哲學に對して書物の標題そのものが示す如く、神學の一科としての宗教哲學即ち特定の歴史の宗教——彼にあつては改革者達の抱ける基督教信仰——の信仰の立場に立つて啓示といふ事實に出發する宗教哲學の可能とその學的權利を主張せんとするにある。そして更に進んで從來の宗教哲學即ち宗教的現象の上に超然として、身をおき、それら

ば見下しつ、自らばそれらを批判すると稱する中性的な宗教哲學なるもの特定の宗教に對する積極的意義を否定せんとする。従つて彼の宗教哲學は基督教——特に「福音的」との形容詞を付せらる——信仰の、乃至はかゝる信仰に於ける生の實存的な自己解明であり又自己主張となる。そこには宗教が哲學によつて承認され基礎付けをうるのではなくして哲學をば意味のある人間活動の特殊な領域としてその位置をば啓示の眞理の中に見出さうとするのである。しかも此のやうな主張が人間の科學的文化的哲學的意識との關聯を斷念しない限り、宗教は哲學との從來の關係の轉倒をば自己固有な前提——即ち啓示の眞理——からして基礎付け、かうして宗教自身の立場よりして學問や文化や哲學が如何にして可能であるかを解明しなくてはならぬ。そこからして神學の課題が規定される事となるのである。

ブルンナーの該書は二部より成り一部は「課題」と題されてプロテスタント宗教哲學の意味を叫にする事に出發して、その歴史的出發點として改革者達の啓示信仰をとりあげ、その後の史的發展は實は改革者達の信仰に生きてゐた眞理の逆説的統一の崩壞の過程であつて、正統主義、合理主義、敬虔的浪漫的主義、歴史主義は各その眞理の抽象的一面を示すにすぎぬ所以を明にしつ、現代に於ける宗教哲學の課題に至つてゐる。第二部は「啓示の意味」であつて、以上の四つの立場が含む眞理契機をば夫々について考察しつ、合理主義については啓示と理性の問題を回つて(1)認識論即ち眞の存在に關して、(2)道德的問題即ち現實的眞理とは

何かについて、(3)神の義が啓示されたといふ事とそれに對應する信仰に關して、(4)啓示と理性の諸問題について論ぜられ、主觀主義については啓示と宗教的體驗との關係が、歴史主義については啓示と宗教史との問題が、正統主義については神の言としての聖書が問題にされて、聖書と啓示・歴史・科學的宇宙觀・聖典等の諸問題が次々にとしてあげられ、最後に結論として「聖書の啓示と今日の間」なる一章を以て終つてゐる。

著者菅氏は以上の論旨を追ひ原著の行文を辿りつ、それをば一度び自らの言葉に直し、ある處は原文を離れてそれをパラフレーズしつ、誠實に親切に所謂紹介の筆を進めて居られる。従つて翻譯文に屢々見るやうな難解な行文も見當らず、云ひ足らぬもどかしさの感もなく、極めて明解に又興味深く原著の論旨を辿る事が出来る。場合によつては翻譯ではなくして此の様な企てが遙かに好ましい結果をもたらす事を知つて嬉しく思ふ。附録として加へられてゐる「神學の課題とその獨自性」は學としての神學の地位と任務とを手短にまとめたものとして最初に讀むによい、著者はトウルナイセンに負ふ處が多かつたと記して居られる。卷末の參考書及び索引は著者の親切を謝したい。ナ々相當に誤植が目につくのは遺憾である。(四六版三四〇頁、價一圓八十錢)

(松村克己)